読者の広場

上海の電動自転車

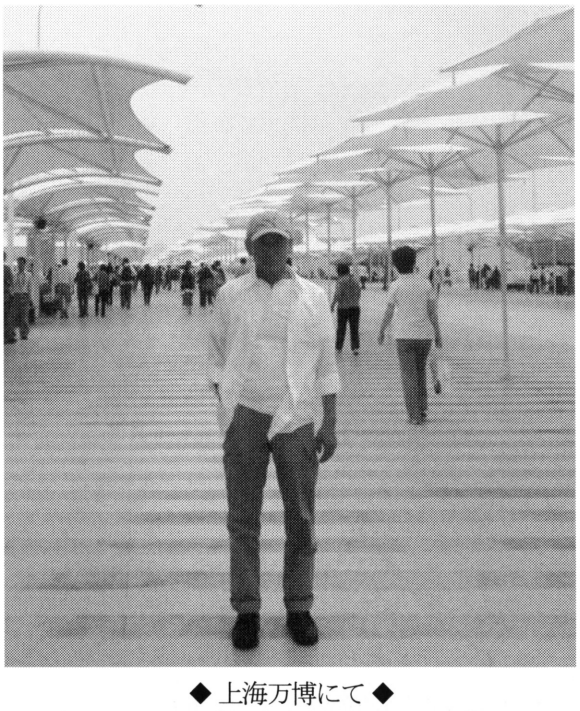
小野 修一郎
（一般社団法人水素エネルギー協会 顧問）
千葉工業大学 経営情報科学科
〒275-0016　千葉県習志野市津田沼2-17-1
shuichiro.ono@it-chiba.ac.jp

2010年10月快適な気候の某日。上海郊外のショッピングセンター。

私は、古い友人のKと、彼の上海のマンションに滞在していて、数年前近くにできたショッピングセンターに食事と買い物に来ている。

マンションという言葉にはすごい違和感があるね。6階建てなのにエレベーターがない。その3階。とても邸宅などと呼ぶほど立派なものではないけれど、日本では他に適当な呼び名がないから仕方ない。最初の誰かの造語がまずかったんだね。10年ほど前に建設された団地で、周辺は急速に開発が進んでいる。上海庶民の生活感を実感できるという点ではいい場所だ。

日本式ラーメン店で夕食して、ショッピングセンターを出ると、出口にたくさんの三輪車が客を待っている。2年ほど前にもこの三輪タクシーを使ったが、その時は本当に人力で、三輪自転車の後ろに客を最大2人乗せて、マンションまで1キロ足らず走って1元か2元（1元は現在12円余り）だった記憶がある。



◆ 上海万博にて ◆

さっそく友人と二人で乗る。2年前と変わったのは、すべて電動自転車になったこと。全く無音でゆっくり上海の広い歩道を走る。代金3元－ だったかな？街を見てみると、足こぎの自転車は少なくなって、かなり電動に代わってしまっている。上海らしい素早い変わり目。

次の日、ショッピングセンターで自転車売り場を見てみる。メインの商品は電動で、それも日本円で1万円程度。3万円も出せば電動スクーターが買える。

私はKに聞く。「いったいどんなバッテリーを積んでるのかな？そんな最先端の二次電池ではないと思うから、どこにでもある鉛蓄電池に違いない。だとすれば、一度の充電でそんなに距離は走れないはず。買い物とか通勤に使うとしても途中で燃料切れになったら困るね？」Kは答える。「だとしたら、店や仕事場に充電用のコンセントがあるはず。帰りに調べてみよう。」

私たちは、今度は歩いてマンションまで帰る。Kのマンションは、6階建て12戸で1棟。そんな棟が数十連なってマンション団地を形成している。その周囲を建物よりよほど立派な塀が囲んでいる。上海では平均的な庶民の住まい。それでもこの数年の間に団地内の道に夜駐車する自家用車がずいぶん増えた。その塀の周りにクリーニング店、コンビニ、八百屋、雑貨店、ホテル、とりわけたくさんの食べ物屋が軒を連ねる。百円足らずで朝食を食べさせる店もまだある。こんなレストラン－ 食堂と言ったほうがしっくりするかな？－ の前にはいつも客の自転車やバイクが停まっている。それまであまり関心がなかったので気にもとめなかったが、この日は注意して見てみた。なんとほとんどの電動自転車が店の前のコンセントに繋がっているではないか！

Kはわが意を得たという顔で、「さすが中国だねえ。電動車は完全に実用化されている。電気自動車ももうすぐこんな風にどんどん実用化されていくのかな。バッテリーの性能が不十分とか、安全性に問題があるとか、言ってる前にとりあえず使ってみる、その勢いが凄い。」

Kは10年も前に上海にマンションを買ったことでもわかるように、社会経済情勢については私の先生みたいなもの。そのマンションは今では買った値段の5倍になっている。彼は今インドネシアのコーヒー園に興味を持っているらしい。最近上海でもコーヒーショップが急増している。上島珈琲など日本系列店も多いが、1杯400円くらいするので値段は日本と変わらない。中国には以前から茶館と呼ばれる高級なお茶を飲ませる喫茶店があって、この高級茶はやはり数百円するらしい。そのメニューに珈琲が加わって、値段の横並びも座りがよく、コーヒー愛好者が増えていく。12億人の中国人がコーヒーを飲みだすと、たちまちコーヒーが足りなくなるのは当然。コーヒー園の価値も上がるはずということ。しかしここでも中国パワーにぶつかる。世界中どこに行っても中国マネーが買いあさっているそうだ。こういうのはバブルではないんだよね。日本人だってまだ金を持っているはずなのに、どうして動かないんだろう。

私はKに聞く。「電動自転車が上海でこんなに普及したのはなぜかな？」

Kは言う。「電動車の燃費はガソリンの5分の1ともいわれている。（どういうからくりなんだろう？？？）だったら多少技術に不満があっても、使わない手はない。それに中国の電源が200ボルトなのも重要かな？充電速度は電圧の2乗に比例するんだから、日本より有利だね。」

さらに「それに、音がしないから安全性に問題があるなんて誰も言わないからじゃないか。」